



Title	中国近代ユーモア文学の射程：漱石という「鏡」から
Author(s)	張, 杭萍
Citation	大阪大学, 2011, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/58524
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【17】

氏 名	張 翊 萍
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第 2 4 2 8 7 号
学 位 授 与 年 月 日	平 成 23 年 3 月 25 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科文化表現論専攻
学 位 論 文 名	中国近代ユーモア文学の射程—漱石という「鏡」から—
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 清 水 康 次 (副査) 教 授 出 原 隆 俊 准教授 橋 本 順 光 近畿大学准教授 大 東 和 重

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、中国の近代文学において、一時期大きな潮流となった「ユーモア文学」について、1920年代から40年代にかけての著名な作家たちの作品を取り上げながら、ユーモアの提唱をめぐる動向、時代状況とのかかわり、それぞれの作家や作品の特徴とユーモアが作り出されるメカニズムを明らかにしようとしたものである。その際、1920年代から中国語に翻訳され始め、中国の近代文学に大きな影響を与えた夏目漱石の文学を指標とし、漱石の作品におけるユーモアと中国の作品におけるユーモアとを比較しながら、彼我の類似点や相違点を捉え、その由来や理由を考察している。

中国文学における近代化の運動は、日本への留学の経験者によって担われていた部分が大きく、西洋文学からの直接的な影響とともに、日本の近代文学からの影響を受けているが、第一章では、漱石の作品が多く作家の関心を引き、紹介され、翻訳されていく過程が詳細な調査によって跡づけられている。魯迅・周作人の日本留学時代から始まり、創造社の文学者たちが受けた影響、また、1920年代・30年代の翻訳や紹介について調査し、『吾輩は猫である』や『草枕』などの小説だけではなく、難解な『文学論』にも関心がもたれ、理解され応用されていた様子が明らかにされている。

第二章では、「ユーモア文学」の内包するものを明確化するために、1930年代の林語

堂の提唱とそれを受けて展開された論争に注目する。「幽默 (ユーモア)」という訳語を発案した林語堂の理解と主張を捉え、一方、それを批判する魯迅や錢鍾書の主張を見、その理由を問うていく。そこに、それぞれの論者の持つユーモアの概念の相違だけではなく、当時の中国の現状に対する認識の相違が明らかにされていく。

第三章以降は、著名な作品を取り上げて、漱石の作品と比較しながら、その類似点と相違点に注目していく。第三章では、魯迅の『阿Q正伝』と『吾輩は猫である』が比較され、無名性・自己暴露・死生観などについて考察される。魯迅が、「阿Q」を造型するにあたって、アーサー・H・スミスの *Chinese Characteristics* の日本語訳である『支那人気質』を読んでいたことなどが明らかにされている。

第四章では、老舎の『二馬』・『猫城記』と漱石の「倫敦消息」・「自転車日記」が比較される。時期は異なるが同じくロンドン留学を経験し、同じく東洋人への差別的な視線を受けながらも、なお日本人に対する差別と中国人に対する差別との違いが、漱石のユーモアと老舎のユーモアの違いにつながっていくことを捉え、『猫城記』には老舎の憤激が表されていると述べている。第五章では、錢鍾書の『猫』・『困城』と『吾輩は猫である』とが比較される。それぞれの作品の土台となっている、当時の中国での知識人のサロンと日本での漱石を取り巻くサロンに目を向け、留学体験者などの当時の先進的な知識人というもののあり方に注目し、知識人の作る有閑のサロンとユーモアとのかかわりについての考察を試みている。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

中国の近代文学における1つの潮流の全体像に迫ろうとした意欲的な試みであり、取り上げられる作品も著名な作品が多い。漱石の作品との比較という方法を通して、彼我の類似点と相違点から、個々の作家や作品の持つユーモアの特色を明らかにするとともに、さらに、当時の中国と日本の歴史的状況の違いにも目を向けていこうとしており、比較という方法の有効性や視野の広さが評価できる。

しかしながら、対象となった領域は広く、その全体に十分な目配りができていないといえない。また、対象として取り上げた作品には既に多くの研究がなされてきており、その先行研究がきちんと踏まえられていない箇所がいくつも見出される。これまでの中国近代文学の研究文献、また、日本近代文学の研究文献が、網羅的・系統的に参照できていない。各章の論理の展開についても、必要十分な論証がなされ、結論に向かって明瞭な組み立てがされているとはいえず、1840字187頁(400字詰860枚)の論文ではあるが、やや冗長の感がある。また、「人生観としてのユーモア」「表現法としてのユーモア」という分類や「風刺的ユーモア」「閑適的ユーモア」という分類はあいまいであり、「笑い」の裏に必ず「苦悩」を見ようとする姿勢など、ユーモアについての捉え方に未熟さや平板さが見出される。

とはいえ、大きなテーマに真摯に取り組んだ力作であることは認められる。中国近代の「ユーモア文学」と日本の近代文学との比較研究を通して、さまざまな新しい発見をもたらそうとする試みには、大きな可能性がある。また、論の中での細部の指摘には、発展させるべき着目がいくつもあり、そこを深めていけば従来の研究を補っていくものと予想される。今後、先行研究を十分に踏まえ、それぞれの部分の調査と論証を積み固めていけば、大きな成果が期待できる。以上のことを鑑み、本論文を博士（文学）の学位にふさわしい価値を有するものと認定する。